

西表島、大半が原始林で覆われる緑濃い島を歩くと、山の歩道にヤシの木が植えられていた。公共事業では街であるが山であるうが、道には街路樹やフラワーボックスがセツトになっているらしい。島の人はいう。

「二年もたったら、木の周りは雑草に覆われて歩けなくなります。フラワーボックスも手入れの予算がつかないから、やがて邪魔になるだけです」。

別の場所では道幅を広げる工事が行われていた。そばにはドライ

バーへの「ヤマネコに注意」の看板が立っている。島のシンボル、イリオモテヤマネコの推定数は約百十匹だが、昨年中に六匹が車

横切るのは自殺するよいうなものです。やがてイリオモテヤマネコが少なくなった島には、「ヤマネコに注意」のサインだけが残るかもしれない。



大森 信

し波が出芽したばかりの水辺のヒルギを洗い流してしまうという。帰りのコースではどうしても船脚が速くなる。船着き場で待っている。バスの出発時間が迫っ

くす典型的な例である。石垣島では、サンゴが農地から流れた赤土をかぶって死んでい

グスク群が世界遺産になったと喜んだのに、人々は自分が生まれた島のさんご礁が世界でもっとも貴重で、保護しなければならぬという海外からの指摘にはあまり関心を示さなかった。

### 緑の歩道に街路樹は必要か

### 離島振興事業にみるむなしさ

にはねられて死んでいたぞうだ。別の島民はいう。「道路を広げると、車はスピードを出すのです。夜行性で光が当たると立ち止まってしまうヤマネコにとって、夜、広い車道を

仲間川のマンガロープを観光船で見に行っ

ているからだ。八重山やバナナを買いに来る人がいるだろうか。澄んだ海とやさしい島の暮らしを訪ねる観光客がおみやげにするのであって、フィリピン産

沖繩の人たちは古来、海と土の恵みを巧みに生活に取り入れ、世代から世代へ、祖先と自然に感謝して暮らしてきた。さんご礁は毎晩のおかずになる魚を捕ったり、アーサを採ったりする生活の場であった。それがいつの間にか、なぎさを

埋めたり、必要のない道路を造ったりするの

が日銭が稼げるといって考えに変わってしまった。次代に残し伝えておくべき島の宝を、沖繩県民は自分で失おうとしている。遠くから来る者にとって、さんご礁が少しずつ失われても、森の緑とそこにすむ動物たちが死んで

いっても、それほど痛みは感じない。沖繩はつまらないから今度は海外に行こうという程度のものだ。賢明な島人たちは他人を当てにしてはならない。(阿

嘉島臨海研究所所長)